

第2回
日韓演劇フェスティバル
参加出演

2012年2月13日(月)

於：一心寺シアター倶楽

*詳細はホームページでもお知らせします。
ご期待ください!

*公演案内をご希望の方は、アンケート用紙に
ご住所、お名前をご記入下さい。

朗読 GEN に入って
一緒に朗読を学びませんか!

文学を立体的に立ち上げて、人物が動き出したら、面白いでしょう。演劇と違うのは脚本化せず、原作を大切に舞台化すること。

文学好きなあなた、一緒に舞台を創りませんか。スタッフとして活動して下さる方も大歓迎です。稽古見学にも、お気軽にお越し下さい。お待ちしております。

■お問い合わせ、チケットのご予約は

TEL&FAX / 0742-48-8688(秋山)

メール / roudokugen@yahoo.co.jp

ホームページ / 朗読劇団 朗読 GEN

<http://r-gen.jimdo.com>



小泉八雲

耳なし芳一

宇江佐真理 概ね、よい女房

2011年

7月30日(土) 16時開演

7月31日(日) 13時開演

会場 / 一心寺シアター倶楽

朗読劇団
朗読 GEN 第9回定期公演

■キャスト

耳なし芳一

芳一……………秋山太加
住職……………田中章恵
老女(下男)……太田淑子
武士(下男)……福嶋左知子

特別出演……………関川鶴祐

おおい 概ね、よい女房

おすま・おちか……福嶋左知子
実相寺泉右衛門……田中章恵
大家・幸右衛門
お紺・初五郎……太田淑子
おとき・留吉……秋山太加

■スタッフ

構成・演出……………秋山太加
舞台監督……………佐野泰宏
(CO)
音響……………西角秀紀
(劇ムーブファクトリー)
照明……………牟田耕一郎
(劇団ヤマコア)
衣裳製作……………青柳秀子
ヘア・メイク……………五十嵐公子
(日本メイクアップアーティスト学院)
宣伝デザイン……………桂 瑞子
劇中踊り振付け・指導……平城花歌
(平城(59ヤサ)流楽元)
記録……………小島知光
ヘア・メイク……………北田華代
寺田 茜
大崎里紗
プロンプター……………坂田昌子
題字……………秋山太加
制作……………丹原祐子
(office P-T企画)
協力……………杉本レイコ・つじたゆみ
MIYA・よこがわくみこ
田中仁美・亀井恵子
印刷……………宣光社
稽古場協力……(株)ムーブファクトリー
企画・製作……朗読劇団・朗読GEN

奏していただけることになりました。迫力ある響きと共にこの物語を、一心寺シアターで上演できることを本当に嬉しく存じております。

暑い中、足をお運びくださいましたお客様、そしてさまざまお力添え頂いた方々のお陰で今年も公演をおこなうことが出来ます。心より感謝申し上げます。

どうか最後までごゆっくりお楽しみ下さい。ありがとうございます。

演出・秋山太加

【関川鶴祐プロフィール】

1956年、大阪生まれ、現在奈良在住。鶴田錦史に師事。8歳の時、小林正樹監督の映画「怪談〜耳なし芳一〜」を見て琵琶演奏に惹きつけられたのがきっかけとなり、琵琶奏者を目指す。1974年 四国八十八ヶ所踏破。1979年 NHK邦楽オーディション合格。1985年 日本琵琶コンクール第1位入賞。文部大臣奨励賞、NHK会長賞受賞。1991年 日本青年会議所が傑出した10人の若者に送る賞を受賞。1993年 臨濟宗建長寺僧堂に掛塔、座禅修行に赴く。2011年4月 奈良平城京天平祭において、大極殿の前で東日本大震災

ようこそ!

ラフカディオ・ハーン

小泉八雲の世界へ

ルーツ、その生い立ち

ラフカディオ・ハーン=小泉八雲は、1850年6月27日、ギリシャのイオニア諸島のレフカス島(古名レウカディア)に生まれた。ラフカディオの名はこの古名にちなむ。父はアイルランド人で、当時ギリシャ駐屯イギリス歩兵連隊付き軍医であった。母はギリシャ人で、アラブの血もまじっていたらしい。のちに八雲は「自分には半分東洋の血が流れているから、日本の文化、芸術、伝統、風俗習慣などに接しても、肌でこれを感じ取ることができる」と自慢していたといわれる。八雲は両親の

出身を自分の中に深く意識し、二つの対照的な血が自分の中に流れていると感じ



続けたにちがいない。八雲はアイルランドから、フランス、アメリカ、西インド諸島、日本と放浪を続けついに日本で生涯を終えることになる。

父母は激しい恋におちて結婚したが、ラフカディオ2歳のときには二人の仲は冷えていた。4歳のときに父母は離婚、父はすぐに再婚し、彼を残してインドに去る。見捨てられた少年は金持ちの大叔母に養われ、寄宿学校に入学するも、大叔母の破産のため退学した後、アメリカに渡る。

アメリカ時代

19歳の時、大叔母から旅費をもらい、アメリカに。オハイオ州シンシナティに向かい、ホテルのボーイ、電報配達、校正、広告取り、煙突掃除など窮乏した生活をつづけながら、図書館で読書にふける。下層社会、ことに黒人の風俗を好んで書き、世評高まる。下宿先の混血黒人の炊事婦と結婚しようとするが反対されて断念する。すすんで下層社会、貧民街の黒人たちの間に身をおいた。1877年 ニューオーリンズに行く。79年5セント食堂「不景気屋」を開くが共同出資者に持ち逃げされ、20日でつぶれる。

2年後の31歳のときに南部一の新聞「タイムズ・デモクラット」紙の

文芸部長として招かれ、ゴーチェ、ボードレールなどヨーロッパ文学の翻訳、紹介につとめ、名訳者として名を上げる。エジプト、ユダヤなどの民族伝承に材

をとった短編集を出版。様々な著書を次々出版するようになる。

そして・・・日本へ

1890年「ハーバース・マンズリー」誌より、挿絵画家ウエルドンに従って、日本に特派された八雲は4月4日、横浜に到着。その後契約に不満を抱き、ハーバース社と絶縁する。東京帝国大学教授B・H・チェンバレンの紹介で高根県松江中学校の英語教師となる。41歳で旧士族の小泉節子と結ばれる。その当時の住居は現在保存され、隣接して小泉八雲記念館がある。松江の厳しい寒気のため生来の弱視がますます悪化することを恐れて、熊本、第5高等学校へ転任する。その後神戸、京都、奈良など日本各地を回り、日本印象記を「タイムズ・デモクラット」紙に掲載する。

日本に帰化して

1894年、神戸に移り、翌年妻子の将来を考え、帰化し、小泉八雲と改名することを決意する。96年、東京帝国大学の英文科講師となる。月俸400円。人力車で本郷に通う。学生に上田敏、小山内薫がいた。1903年大学から契約を終了するとの通告を受ける。しかし、学生が留任

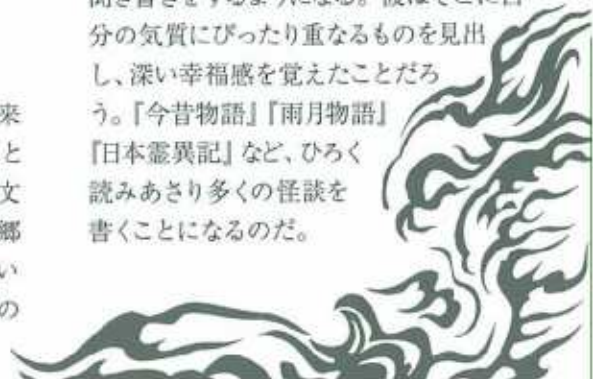
運動をおこしたため驚いた大学は授業時間と俸給を半減するが契約を続けるとの妥協案を出す。が、拒絶して著作に専念する決意を固める。翌年54歳で狭心症で急逝する。雑司が谷墓地に葬られた。妻節子は1932年死去する。

八雲と怪談

父母の不和に始まる不幸な家庭環境は、幼い八雲の神経を過敏にし、5歳のころに寝室で見た怪奇な幽霊のことを「夢魔の感触」という追憶文の中で語っている。

カトリックの宗教教育によって更に恐怖心を煽られた彼はキリスト教に反感を覚え、次第に神と精霊を強く恐れるようになる。少年時代にはくぐまれた怪奇、超自然への関心は、キリスト教と、西洋合理主義への反感から、ますます強められていく。アメリカ時代には、中国の怪談の翻訳や、インド、アラビア、ユダヤなど「異国文学」の民話、伝説、神話を翻訳するのである。日本人の生活習慣や、風俗の中に霊的なもの、怪奇なものを数多く発見し、熱心に聞き書きをするようになる。彼はそこに自分の気質にぴったり重なるものを見出し、深い幸福感を覚えたことだろ

う。「今昔物語」「雨月物語」「日本霊異記」など、ひろく読みあさり多くの怪談を書くことになるのだ。





耳なし芳一 作品解説とあらすじ

1850(嘉永3)	ギリシャのレフカス島に生まれる
1853(嘉永6)	父母仲冷却。母はギリシャに戻る 大祖母(祖母の妹)に引き取られる
1856(安政3)	父母離婚。父は再婚しインドへ
1863(文久3)	イギリスのカトリック系神学校に 入学。遊戯中左目を失明
1866(慶応2)	父がスエズで病死
1867(慶応3)	大祖母破産。神学校中退。フラン スへ。フランス文学に親しむ
1869(明治2)	アメリカに渡る。煙突掃除、電報 配達など窮乏生活を送る
1874(明治7)	日刊新聞の記者となる。下層社会 黒人の風俗を好んで書く
1878(明治11)	「デイリーアイテム」紙に入社。 評論、随筆、翻訳に筆をふるう
1889(明治22)	「ハーバースマズリー」誌から2ヶ月の 予定で日本に特派されることになる
1890(明治23)	横浜到着。1ヵ月後契約の不满から、 ハーバー社と絶縁。松江へ
1891(明治24)	小泉節子と結婚。11月熊本へ
1893(明治26)	単身長崎へ。長男一雄生まれる
1894(明治27)	「知られぬ日本の面影」出版 「神戸クロニクル」誌の論説記者 として神戸へ移る
1895(明治28)	日本に帰化、改名
1896(明治29)	京都、奈良、大阪など旅行。上京し、 東京帝国大学英文科講師就任
1897(明治30)	次男巖生まれる。富士山に登る
1899(明治32)	「雲の日本にて」出版。三男清 生まれる
1902(明治35)	「日本お伽噺」「骨董」出版
1903(明治36)	帝国大学契約終了。学生の留任 運動起こる。長女寿々子生まれる
1904(明治37)	早稲田大学に出席。「怪談」出版 狭心症で急逝。葬司が谷墓地に 葬られた

【参考にした書物】
新潮文庫「小泉八雲集」
徳間文庫「おちゃっぴい」
小学館「平家物語」
大阪書籍「平家物語の世界」
講談社 古典の旅「平家物語」
河出書房新社「民具の事典」
講談社 少年少女日本文学館「平家物語」
名著刊行会「日本社寺大観」
汐文社「怪談・小泉八雲のこわい話」
講談社「大江戸庶民いろいろ事情」
青春出版社「見取り図で読み解く江戸の暮らし」

この作品は1904年(明治37)4月に出版された『怪談』の1篇である。この作品の序文には「アトランティック・マンズリー」誌1902年2月号に八雲を論じた当代の代表的批評家P・E・モアの文章を引用して、西洋の読者にとって八雲文学の魅力は、日本人の美意識によって育てられた東洋の仏教思想が、西洋近代の科学的精神を通じて伝えられるところにあると述べている。子供向けなどいろいろ訳がでているが、今回は新潮文庫「小泉八雲集」から取り上げた。平家物語を背景に書かれた物語である。目の見えない琵琶法師が、ある夜現れた武将にどこか高貴な方々の居館に連れていかれる。さて、そこで6日の間琵琶を語って聞かせるようにと申し渡されるが・・・

平家物語

中世・鎌倉時代前期の軍記物語。和漢混交文で書かれており、作者については確証はなくいろいろ説がある。信濃前司長が(作)、生仏という琵琶法師に語らせたという説が一般に流布されているが諸説あって確かではない。内容は、栄華と権勢を極めた平家一門が源氏に追われ、西海に消えうせてしまった栄枯盛衰の物語である。永井路子氏は「なんと手垢にまみれた古典だろう。手垢にまみれながらもなんと玲瓏たる姿を保ち続けてきた古典だろう」と書く。多くの人に愛され、親しまれたのは、これが琵琶法師によって演じられる「語りもの」であり、法師の前には必ず聴衆がいたからである。語られることによって、本文も変化し、実際の史料とは違う点が多々あるにも関わらず、人々に愛されてきた物語の魅力はますます輝きを増すようである。来年の大河ドラマは「平清盛」とのこと。これを機に手にとってみようと思われる方もあるのでは・・・

壇ノ浦の戦い

壇ノ浦は山口県下関市東端の海岸。下関海峡は関門海峡の古い呼び名。1185年3月、源平最後の戦い。神器とともに安徳天皇(8歳)入水。母建礼門院は入水するが源氏勢に助けあげられる。平家はこの戦いで滅亡する。阿弥陀寺・・・現在の赤間神宮、祭神・安徳天皇。明治8年改称。後ろに紅石山、前は海に臨む。社殿の東に天皇の御陵、山の坂口に平家一門の墓がある。

八雲メモ (一)

松江に着任数日後の「松江日報」は八雲を「本邦に在留せる西洋人はとかく自國の風を固守し我邦の事物を目して野蛮なり、未開なりと悪し様に批評する輩あれど今度本邦に雇入れられたるお雇い教師ヘルン氏は感心にも之に反して、日本の風俗人情を賞賛すること仕切りにして其身も常に日本の衣服を着して日本の食物を食し、ひたすら日本に歸するが如き風あり・・・」ときわめて好意的に報じている。

西洋ざらい、キリスト教ざらいの八雲にとって、当時古代からの奇妙な風俗を多く残していた松江は安息の地となったのだろう。士族の娘と結婚し、生涯の友となった松江中学教頭西田千太郎の協力を得て、食欲に出雲を歩き回り、土地の風俗、人情について知識を吸収した。それは最初の著作「知られぬ日本の面影」として結実する。彼がいかに霊的な日本を愛し、讚美していたかが表れている書物である。

八雲メモ (二)

その後多くの怪談や奇談を書き続けたが、彼の愛した古い、美しい日本が失われていくのを悲しむつつも、近代化を推進し、新生の独立国家として国際社会に生きていくためには新しい日本を受け入れていくことの必要性を認識していったと思われる。死後刊行された『神国日本』という書物の中で(この神国は八百万の神祇が住む日本というような意味であったが)これからの日本は、西洋近代の文明を取り入れ、近代化への道を進まざるを得ない、それが歴史の必然であろうと書く。しかしまた日本は本来の美を失ってはならない、いや失うことはないだろう、日本は死者が神々となって支配する国であると八雲は書いている。

宇江佐 真理

1949年北海道函館市生まれ。95年「幻の声」でオール読物新人賞を、2000年「深川恋物語」で吉川英治文学新人賞を、01年「余寒の雪」で中山義秀文学賞を受賞。著書に「玄治店の女」、本日の演目「概ね、よい女房」所収の「おちゃっぴい」など。

概ね、よい女房一解説

(縄田一男氏の解説より引用)
平岩弓枝の「御宿かきみ」や北原亜以子の「慶次郎縁側日記」といった長寿シリーズは別にして新たな市井物の書き手が次々と輩出したのは、バブル崩壊後のことである。それまでは、組織のリーダーが読むような乱世の武将物が好まれたが、一転して読者は足元の暮らしを見るようになったわけである。その市井物のトップを走っているのが宇江佐真理である。市井物のスター作家として人気を誇る山本一力が、今日、新人作家の道を拓いた功績は宇江佐真理にあると言っている。文春の編集者から、「幻の声」が出て、新人の時代小説でも売れることを実証されたからこそ、今こうして続いているんですよ」といわれたと。

市井とはもともと古代中国で、井戸、すなわち、水のあるところに人が集まり、市が出来たところから、転じて、人家が集まっているところ、町、或いは巷を指す言葉となった。たとえば市井の人といえば町に住む庶民のことであり、そこから市井物といえば、江戸にすむ庶民の哀歎を描いた作品ということになる。さて、本日の舞台でも3人の女たちが共同井戸で意地の張り合いをするがその顛末は・・・

一口メモ

*中村 仲蔵(1736~1790):稲荷町から座頭に出世した稀代の名優。「忠臣蔵」の定九郎が自らの工夫で生涯の当たり役となった。(稲荷町・楽屋に祀った稲荷明神の傍に最下級の者のたまり部屋があったことから、江戸時代、最下級の役役の称を言う)
*居酒屋:江戸時代も居酒屋は庶民の憩いの場。酒を売っていた酒屋がその場で酒を飲ませるようになり「居続けて飲む」というところから「居酒屋」になったとか。
メニューは、おでん1皿4文(76円)、焼き豆腐5文(95円)、がんもどき10文(190円)、揚げすし8文(152円) たまご巻き16文(304円)、もりそば16文(304円)など